

スペリア佐屋の防災について－ 1

1 はじめに

ここ数年来の夏の猛暑や豪雨、冬の寒波や場所により大雪が降るなど異常気象が続いており、一方では巨大な南海トラフ地震の懸念もあり、スペリア佐屋としての防災対策が必要かと思われます。

そこで、私見を交え次のようにまとめて見ましたが、何等かの参考になれば幸いです。

2 スペリア佐屋周辺の地盤の歴史

スペリア佐屋やマンションの周辺の成り立ちや、過去の災害は次の通りです。

- (1) 名古屋大学博物館長の足立守教授によると、今から約1~2万年前の当時の木曾川は愛知県犬山付近から南下し、小牧⇒春日井⇒名古屋中心部を通り、伊勢湾へ流れていたと語っています。
- (2) この地方は、木曾川が山から運んできた土砂でできた「堆積平野」と言われています。堆積平野は土砂により形成され、平坦で起伏のない土地が造られ、西尾張地方は山もなく平らな土地と言え、スペリア周辺は「**堆積平野に盛り土**」の土地と言えます。



- (3) 江戸時代の木曾川、長良川、揖斐川はの下流は一つの河川となっていたため、度々、洪水が発生し、財力を削ぐ目的もあり幕府は薩摩藩に命じて、下図の場所に堤防を築く治水工事が行われました。



宝暦治水の工事箇所と当時の略図

赤い印の地点が、船着き場
(ヨシツヤ佐屋店から西に向かい、
二つ目の信号付近)

青い印の地点が、スペリア佐屋

- (4) 現在のような木曾三川になったのは、1873年に明治政府がオランダ人技師、デ・レイケを招き10年にわたり河川改修工事を行った結果です。



船頭平公園の「デ・レイケ像」

- (5) 当地域は、堆積平野でゼロメートル地帯のため地盤は軟弱と言われており、大地震が発生すればマンションは安全でも駐車場や道路が液状化する恐れがあります。
なお、伊勢湾台風後に工業化が進み、地下水の汲み上げにより地盤沈下が激しかったようですが、現在は汲み上げが規制されているため地盤沈下は落ち着いているようです。

3 スペリア佐屋周辺の建物の歴史

- (1) 船着き場があり、代官所が置かれていました。



船着き場跡



代官所跡



代官所想像図

本来は、名古屋・熱田から桑名まで船での「七里の渡し」が東海道のルートでしたが、外海に面して危険な航路のため、熱田～万場～神守～津島市民病院北で佐屋と天王神社の分岐点があり、日置～ヨシヅヤ西の交差点を経て船着き場へ向かいました。
なお、ヨシヅヤ西の交差点(信号)から次の信号までは旅籠があり、昭和60年前後までは何軒か旅籠であった民家が残っていましたが、現在は全て建て替えられています。

- (2) 昭和34年(1959)9月26日の伊勢湾台風までの建物は旧家、農家、工場等しかなく、スペリアの周囲のほとんどが田畑で、現在の北一色町証文の宅地開発を筆頭に現在のような宅地造成が行われ、当時と比べると佐屋は一変してしまいました。
- (3) 戦前迄は荒井製作所工場には織物会社があり、終戦後に名古屋市東区から自転車工場が引っ越してきたと言われており、スペリアの土地は荒井製作所の男子寮、食堂、浴場がありました。(Aの部分)
Bの部分には織物工場があり、昭和40年代に荒井製作所が購入したものと思われます。
Cの部分のほとんどが田で、付近の保育園もなく道路沿いに少しの店がありました。



- (4) 織物工場を購入前後に男子寮を壊し荒井製作所の工場を建てましたが、平成8年前後にマンション開発業者に売渡し、平成11年(1999)3月にスペリア佐屋が完成しました。

2014.01

執筆者(K)